

妊娠中に接種が推奨されるワクチン

●なぜ妊娠中のお母さんにワクチンを接種する必要があるのか？

妊娠中のお母さんにワクチンを接種する方法を母子免疫ワクチン接種と言います。母子免疫ワクチンの考え方は、赤ちゃんに対する予防接種がない、もしくは出生後すぐには接種できない感染症に対して生まれた瞬間から抵抗力を発揮して欲しい、そのため、妊娠後半に入ったお母さんにワクチンを接種して、お母さんの体の中で抗体を産生してもらい、胎盤を通してお腹の中の赤ちゃんにウイルスや細菌に対する抗体を移行させて抵抗力をつけた状態で出産してもらう作戦をとるものです。ただ妊娠中はワクチンを接種しなくても様々な症状や気持ちの変化と向き合っているお母さんたちはワクチン接種に心配があると思いますので代表的なワクチンのメリットとデメリットを紹介しますので、これを参考にワクチンを受けるかどうか考えてみてください。

【RS ウイルス母子免疫ワクチン：アブリスボ】

RS ウイルスは、主に乳幼児のお子さんに気管支炎、肺炎を起こすウイルスです

以前は秋から冬に流行する傾向がありましたが、現在は5～8月の夏場に流行することが多く、

1歳までに50%のお子さんが、2歳までにほぼ100%お子さんが一度はかかると言われているウイルスです

生まれてすぐには患すると有効な抗ウイルス薬がないため、重症化してしまうリスクが相対的に高く、

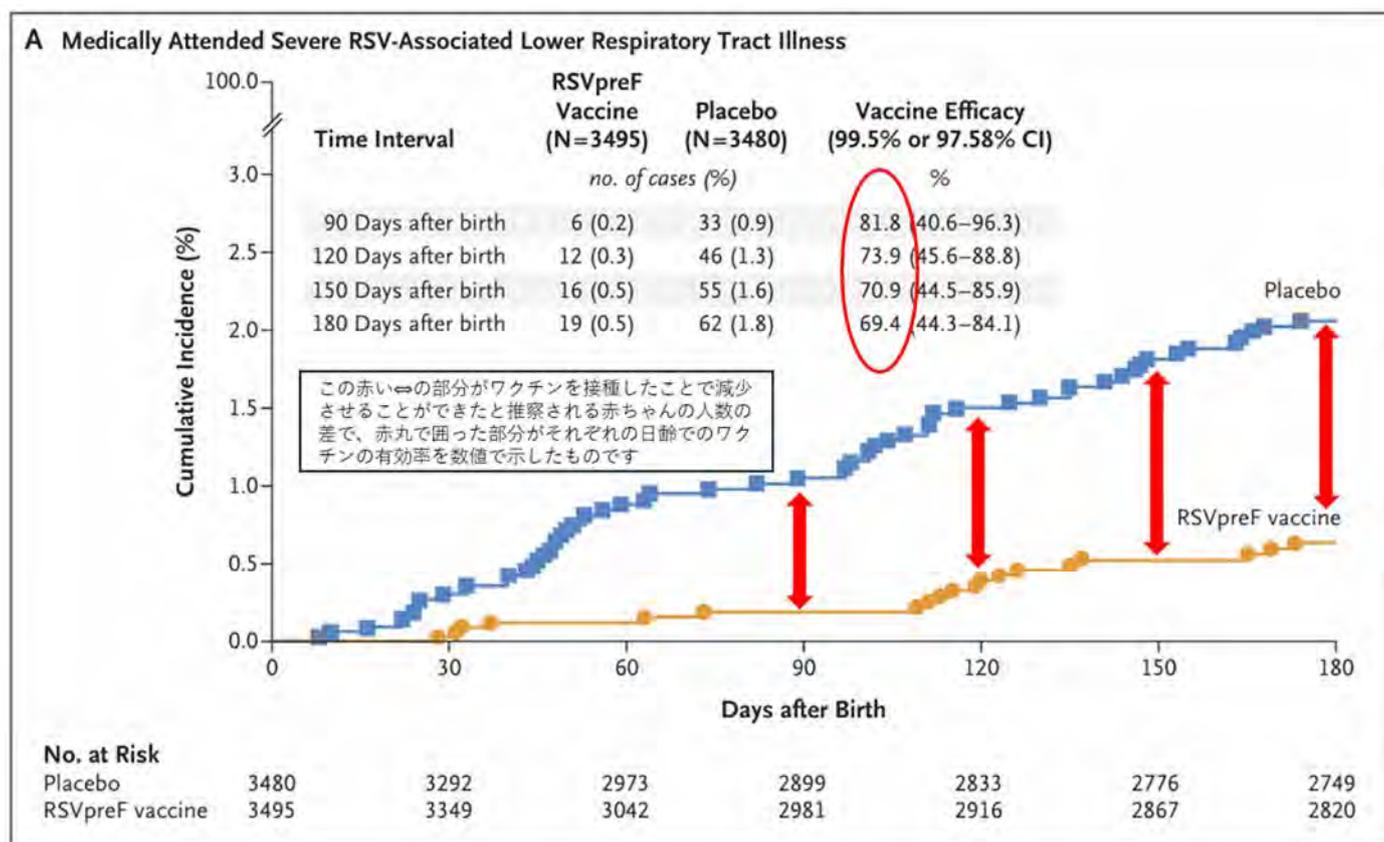
予防したいところですが、こどもに有効性が示せたワクチンの開発はまだなく、

成人に対するワクチンが先に開発されました。

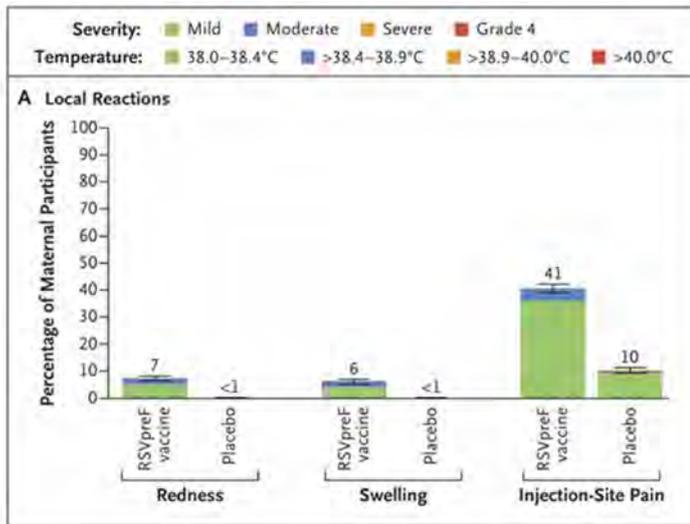
●有効性

妊娠24週から36週の間RS ウイルス母子免疫ワクチンを接種したお母さんから生まれたお子さんでは

重症なRS ウイルス感染症を出生から180日まで69～81%の有効率で防いだ効果が示されました



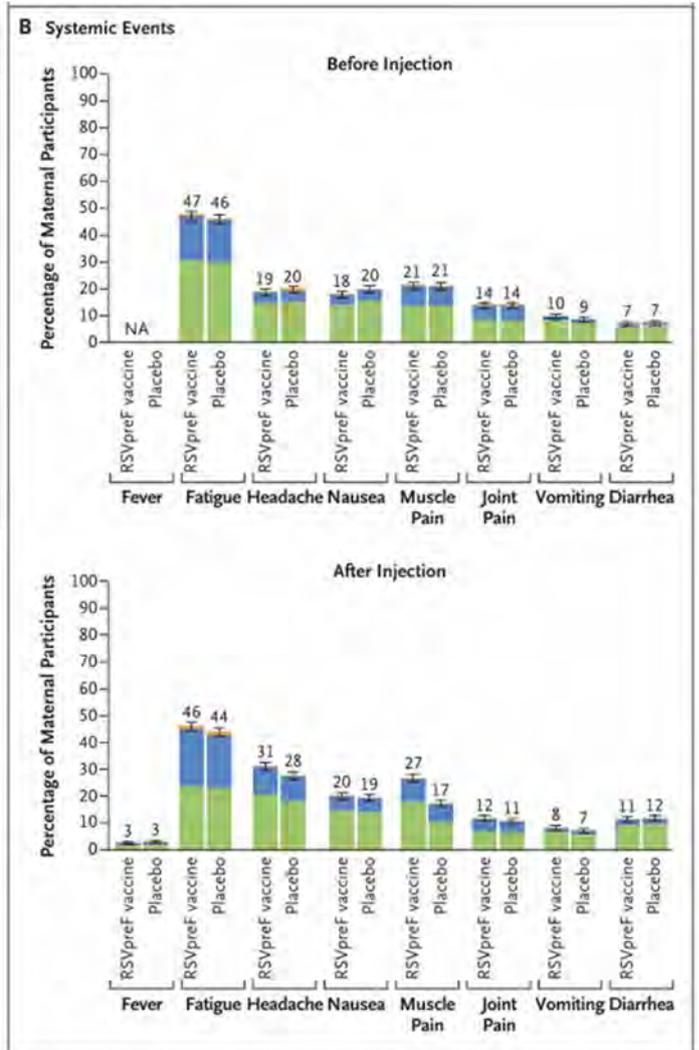
●副反応



ワクチンを接種したお母さんでは注射部位の発赤が7%、腫れが6%、疼痛が41%とプラセボ群よりも多く観察されました。

また接種後1週間以内に発熱3%、倦怠感46%、頭痛31%、嘔気20%、嘔吐8%、下痢11%、筋肉痛27%、関節痛12%で観察されました。

接種前からすでに様々な症状があり、妊娠の大変さを思い知るデータでしたが、私見ではありますが、プラセボ群との比較や接種前と比較して許容できないほどの症状の増加ではないと考えました。



【百日咳含有ワクチン：トリビック】

百日咳菌に対する抗菌薬治療はありますが耐性菌も出現しており、また発症早期は普通の風邪と見分けるのが困難です。乳児期早期の赤ちゃんが罹患すると特徴的な咳がなく、呼吸を止めてしまう無呼吸から急激に症状が悪化してしまい、2024年～2025年の流行期にも基礎疾患のない赤ちゃんが死亡しています。抗菌薬投与もされ、国内でも指折りのこども病院の集中治療室で治療を受けていたはずですが救命が困難な場合があります。日本で使用されるトリビックワクチンでは母体接種により胎児への百日咳抗体移行が確認されています。まだ国内での妊婦接種率が低く、乳児の重症化予防効果はまだ確認、解析されていない点が懸念ではありますが接種を検討する余地はあると考えています。海外のデータのため日本製のトリビックワクチンではありませんがRSウイルス母子免疫ワクチンとの同時接種で抗体価の低下を懸念するデータが出ているため、当院では同時接種は避け、1～2週間間隔をあけて接種を行います。

【予約方法・接種費用】

接種は妊娠28週～36週のお母さんが対象で火～木曜日10時～12時の予約枠で対応します

予約は03-6435-3810からの電話予約のみで対応します(*WEB予約はありません)

RSウイルス母子免疫ワクチン(アブリスボ): 母子手帳、予診票持参で自己負担はありません

百日咳含有ワクチン(トリビック): 9,000円

引用文献: Bivalent Prefusion F Vaccine in Pregnancy to Prevent RSV Illness in Infants.

Kampmann B, Madhi SA, Gurtman A, et al: MATISSE Study Group. N Engl J Med. 2023 Apr 20;388(16):1451-1464. より引用、日本語のコメント部分は院長 高瀬亮によるものです